

やさしい

原木シイタケ栽培

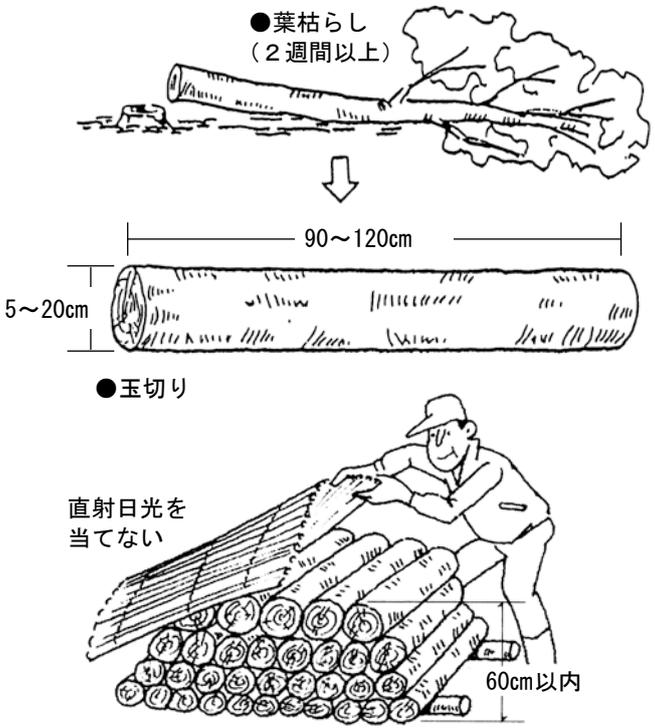
日本きのこセンター

原木栽培の流れと発生パターン

	原木				1年ほだ木												2年ほだ木												3年				
	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
ほだ木育成	原木伐採～玉切																																
					植菌																												
					仮伏せ																												
																	本伏せ																
自然発生	形成菌：植菌1年目の秋から発生												発生1年目												発生2年目								
	種駒：植菌2年目の秋から本格発生																								発生1年目								

1. 原木

原木の伐採

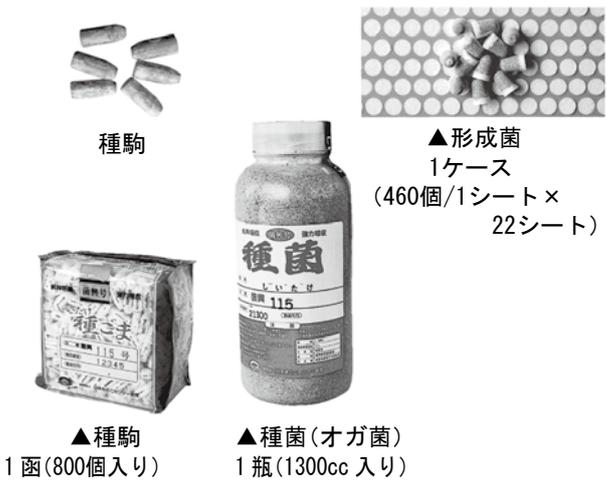


樹種 最も適した樹種はクヌギ、コナラ、ミズナラである。その他アベマキ、ナラガシワ、シデなど。カシ、シイ類も利用できる。

伐採 落葉広葉樹の伐採時期は、秋の黄葉初期から春の新芽が出るまで。カシ類やシイ類は厳寒期の1月から2月が適期。いずれも、樹液の流動が停止した休眠期が伐採適期である。

伐採後の管理 伐採後は、葉がついた状態で1ヶ月ほど乾燥（葉枯らし）させ、水分を抜く。乾燥が不十分であると、樹皮下組織が生きており、シイタケ菌糸の成長が抑えられる。その後、約1mの長さに切断し、植菌場所に運んでおく。植菌するまでの間に直射日光を当てないように、笠木や遮光ネットなどで庇陰しておく。

2. 種菌の種類と取り扱い方



種菌には種駒、形成菌、オガ種菌の3種類がある。種駒は木駒に菌糸を培養させたもの、形成菌はオガ菌を円錐の駒型に形成加工したもの。種駒は9.3mm、形成菌は12.7mmの専用キリで孔をあけて植えつける。シイタケの発生は、種駒は植菌翌年の秋以降になるが、形成菌は植菌した年の秋に発生が見込める。種菌は高温、乾燥に弱く、苗木と同じように生きているので、購入後できるだけ早く使用する。

3. 品 種

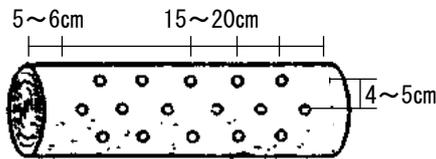
シイタケは品種開発が進んでおり、多くの品種がある。発生温度によって低温性、中温性、高温性などに分けられる。一般的には秋から春まで自然発生しやすい低中温性・中低温性あるいは中温性品種を選ぶのが無難である。

夏季に浸水操作して発生させる高温性品種もあるが、これは自然発生しないので注意する。

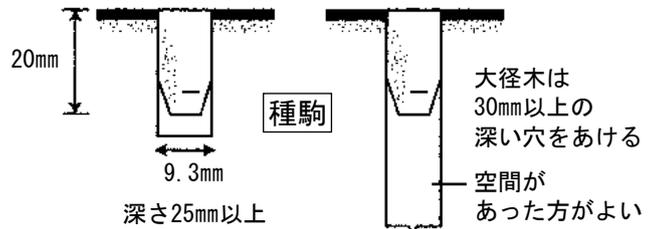
主な品種と特徴

品種	発生時期	特徴
115号（低中温性）	冬～春	最低気温8℃位に下がってきたら発生する。形成菌は1年目から発生しやすい。
324号（中温性）	秋～春	最低気温14℃位に下がってきたら発生する。初年の走り子が多い。
240号（中低温性）	晩秋～春	最低気温10℃位に下がってきたら発生する。秋の発生比率30%位。

4. 植 菌（種駒の場合）



樹皮面から頭を出さない
奥に入れ過ぎない



植菌時期は2～4月、梅の花が咲く頃からサクラの咲く頃が適期

種駒は直径9.3mmの穴をあけ、金づちで種菌の頭が樹皮面より出ないように打ち込む

植菌個数は木口直径（cm）の2.5～3倍の数が標準

5. 仮伏せ（植菌後～4月頃）



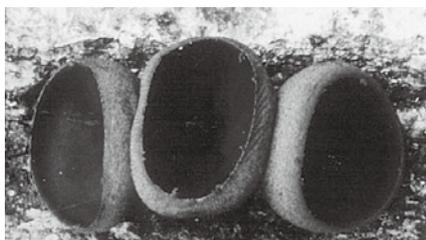
林内の仮伏せ



裸地の仮伏せ（笠木で日覆）



人工庇陰下の仮伏せ



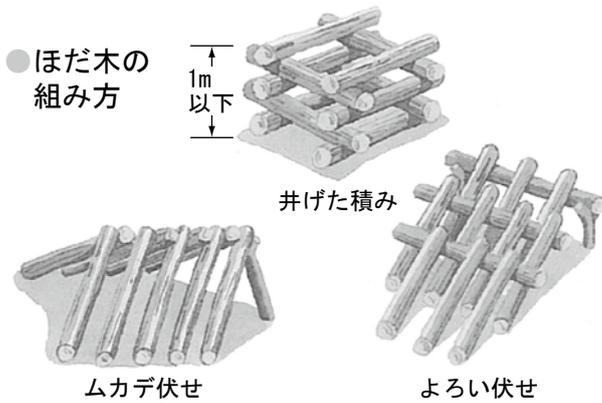
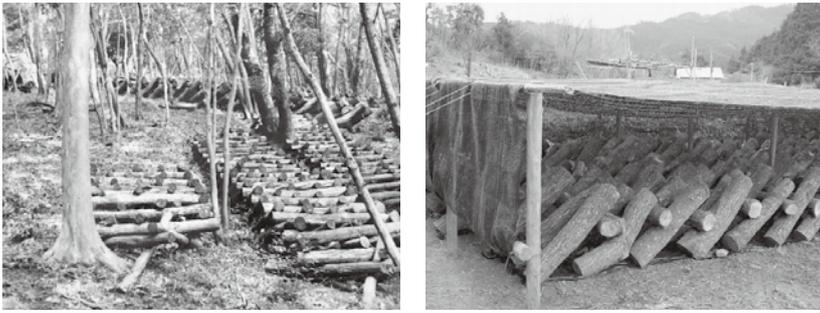
ゴムタケ
普通に発生するきのこで問題ない
これが出る頃、本伏せする

植菌したら、菌糸の活着をはかるために、ほだ木を棒積み（横積み）しておく。場所は日当たりの良い林の中が適。裸地や庭先など乾く場所ではコモ、ムシロ、枝葉などをかけて保湿をする。乾くところでは、週に2回ほど散水する。

4月以降は林の中など日陰に移動する。

木口の菌糸紋、ゴムタケが発生してきたら本伏せする。

6. 本伏せ（5～6月頃下図のように組み替える）



場所に応じて組み方を変える。各ほだ木に雨が当たり風が通るようにする。

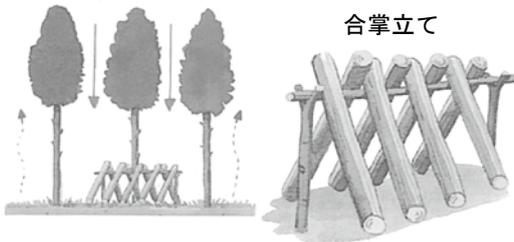
種駒は、駒の頭が白く発菌したころ、形成菌は、木口に菌糸紋が出現するころを目安にヨロイ伏せなどに組み替える。

伏せ込み場として望ましい環境は、春から秋まで直射日光が当たらず、十分に雨が当たり、かつ通風が適度にあり、排水の良い場所。庭の木陰なども利用できるが、直射日光が当たらないように注意する。庇陰が不十分なときは、遮光ネットやヨシズなどをほだ木の上に張る。梅雨から夏期は、雑草や低木を刈り払い、通風をよくする。

9月ころにほだ木の天地返しや積み替えを行い、菌糸を均一に成長させる。

7. ほだ起し（10月頃）～きのこ発生

- ほだ場 雨がよく当たること
直射日光が当たらないこと



発生温度が到来したらきのこが採りやすいように、ほだ木が重ならない程度に立てる。



秋から春まで断続的に発生する。冬期は低温、乾燥で成長が止まるが、袋掛けなどで成長を促進する。春は成長が早いので採り遅れないように採取する。

- 成長管理 プッシュピン止め



袋掛け
保温、保湿効果と雨よけ効果もある。



ほだ起し 伏せ込んで1夏経過した秋に、ほだ木をきのこの発生に適したほだ場に移し、採取しやすいように立てかける。

ほだ場 ほだ場は、湿度がやや高く冬暖かい南向きの林内が適している。庭の場合は強風や直射日光が当たらないように工夫する。

発生管理 9月頃に、きのこの原基が形成される。その後気温がその品種の発生温度にまで下がってきたらきのこが発生する。原基形成時期（9月頃）ときのこが発生する時期には水分を十分与えてやる。

採取 採取は、柄を持って石づきからもぎとる。傘が全開すると品質が落ちるので、開ききる前に採取する。

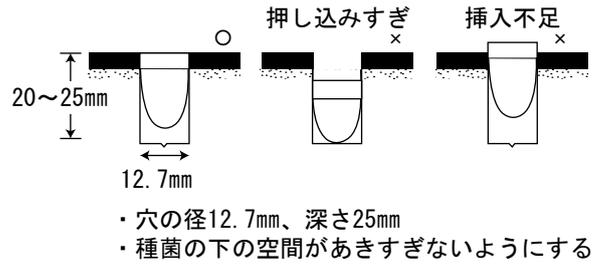
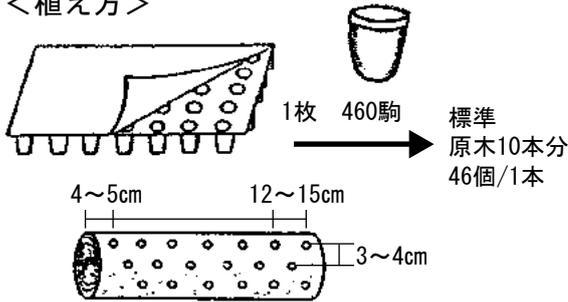
雨に当たると水分を多く含んだきのことなる。水分の少ない日和子での採取を心がける。

8. 採取後～夏越しの管理（5～10月）

春4月まで発生するので、採り残さないように採取する。採取後は、直射日光が当たらないことを確認し雨が良く当たる夏涼しい林内で夏越しさせる。植菌後3年以上たったほだ木は水を多目に与える。

115号形成菌の植え方と栽培方法

<植え方>



形成菌は、オガ菌を駒形に加工し、発泡スチロールのフタを付けたもの。
植菌した年の晩秋からきのこが発生しやすい。

<形成種菌の扱い>

形成菌は購入後早く（1週間以内を目処に）使用する。使用するまでは5~15℃の場所で乾燥させないように保管する。



寒冷期はシートで覆う



乾く場所では散水する



日陰で雨が当たるように



低温・乾燥時期にビニールシートやポリ袋をかけるとジャンボきのこが採れる。

<植菌後の管理~保湿が大切>

○12~2月（寒冷期）：暖かい場所を選び、植菌したら棒積みにし、その日のうちに青シートや黒ネットで覆う。

○3月以降：林内や日陰地でネットなど通気性ある資材で覆い、一週間に1~2回の割で散水する。

点検 時々内部の湿り具合をチェックする。

結露や湿り気が少しあれば良いが、乾いている場合には、軽く散水してから包む。日差しが強いところは高温に注意（25℃以上にしない）。

<伏せ込み~日陰が大切>

4月には、木の下など日陰のある場所に移動し、すき間があくように組みかえる。

建物や塀の壁、庭木に立て掛けてもよいが乾燥させないように工夫する。

直射日光は厳禁。日が射すところは遮光ネットなどで日陰を作る。雨が当たらないとよくない。庭先では散水をこまめに行う。

<きのこ発生~水分と湿り気が大切>

発生前 夏から秋にかけては水分が必要。多めに散水する。10月には、風当たりの弱い、乾きすぎない場所で、きのこが採りやすいようにほだ木を立てる。

芽切り 日最低気温が8℃以下になる頃から芽切りが始まる。散水して、芽切りを促す。



成長 低温、乾燥が続くと枯死する。ビニールで覆って温室状態にし、成長促進する。

<採取後~夏越しの管理>

日陰で雨が良く当たる場所で夏越しさせる。夏~秋にかけてこまめに散水する。

栽培のご相談は日本きのこセンターまで